

2025 年度 東北支部活動 開催報告

主 催：公益社団法人日本語教育学会
開 催 日：2025 年 12 月 13 日（土）9：30-12：00
会 場：オンライン
参加人数：33 名（会員 24 名、一般 9 名）

2025 年度の東北支部活動が 12 月 13 日（土）にオンライン（Zoom）で行われました。今回のテーマは「Can-do？ Can't do？ – 「参照枠」に基づくカリキュラムと評価の再設計に向けてー」でした。近年、「日本語教育の参照枠」や「Can-do」は日々の実践に取り入れられることが多くなってきましたが、その活用には課題を感じている方も多いようです。そこで、今回の支部活動では、参照枠に基づいたカリキュラム作成、授業、評価について、認定日本語教育機関である宮城県の大崎市立おおさき日本語学校の瀬戸稔彦先生にお話を伺い、その後、参加者同士、話し合う機会を持つこととしました。

瀬戸先生には、まず、学校の成り立ちや特徴のある科目・活動、日本語学校卒業後のキャリア支援体制など、学校の紹介をしていただきました。次に、バックワード・デザインとフォワード・デザインという 2 方向からのカリキュラム作成思考を持つことの重要性、Can-do の設定の方法、多読や交流といった活動を含む授業での評価などについて、具体例を交えてお話しいただきました。最後に、瀬戸先生は、授業と並行してカリキュラム作りを行う大変さに理解を示した上で、「現場 Can-do」を作り、全体像や教師同士の横のつながりの可視化を進めること、カリキュラム作りは教師のためとも考えられることなど、示唆に富むアドバイスをくださいました。

後半はグループに分かれて、およそ 30 分間、ブレイクアウトルームで活発な情報交換、話し合いが行われました。「参照枠を活用したカリキュラムを実際に作った先生、今作っている先生方の取り組みの状況や、工夫をお聞きすることができ、貴重な機会となった」「全国の先生方と現場の率直な課題をお話しでき、こちらも大変貴重だった」などの声が聞かれ、有意義な機会となったようです。瀬戸先生には、ブレイクアウトルームを巡回し、参加者からの質問にも答えていただきました。

事後アンケートでは、「認定校の取り組み事例を知りたいと思っていた」「認定申請を目指す中、色々な方のお話を聞くことができ、参考になった」といったコメントがありました。文部科学省への申請準備中の学校が多かったこともあり、テーマが時宜を得たものとして評価されたようです。また、事後アンケートの回答者の約半数が非会員でした。必要な時期に、必要とされる情報を、多くの方に発信できたことで、大変よい評価をいただくことができました。

今回は、事前質問のリンク・QR コードも、参加申し込みのポスターに載せておきましたが、利用者は多くありませんでした。一転して当日は多くの質問があり、安堵いたしました。ご質問くださった方々、ご自分の経験やお気持ちを共有してくださった方々、そして、ご多忙中、わかりやすい資料で、丁寧にご説明、お答えくださった瀬戸先生に、心より感謝申し上げます。

（報告者：支部活動運営委員 田中真寿美・高橋亜紀子・堀田智子）